こまったときの親鸞聖人

安田 登（やすだ のぼる）
能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
寺子屋 講師　（阿弥陀寺）
こどもおばけ合宿 講師　〃
主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』『能　650年続いた仕掛けとは』他多数。

イラスト　中川 学

「七宝の獄にぞ　いりにけるの巻」

できれば「後悔」はしたくない。

宮本武蔵は亡くなる前に「我、事において後悔をせず」と書き残しましたが、凡夫の我らには後悔しないなどというのは、とうてい無理な話です。

多くの人は一生のうち何度も後悔をします。中には、ほとんど毎日後悔しているという人もいるし、後悔とともに毎朝目覚めるという人もいるでしょう。

私事で恐縮ですが、私はいまはお酒を飲みません。しかし、若い頃はよく宿酔になりました。爽快な目覚めに一日の生気を身に滾らせるべき朝なのに、吐き気とともに目覚めてトイレに駆け込む。頭痛はするわ、めまいはするわ。苦しいの、なんの。

「あのとき、あそこでやめておけばよかったのに」とは思うが、もう手遅れ。まさに「後悔先に立たず」です。しかし夜になると「少しならば」と同じことの繰り返し。そして、また翌朝には同じ苦しみを味わい、同じ後悔をする。

後悔というのは、何度も同じ後悔を繰り返すようにできているようです。

後悔とひとくちにいっても、それは一種類ではありません。

大きく分けると、まずはふたつに分けられます。ひとつは「知らず」にしてしまったことに対する後悔。もうひとつは、「知っていながら」したことへの後悔。今回は前者について見てみましょう。私たちは、知らず知らずのうちに日々、たくさんの過ちをおかしています。しかし、そのときには気がつかないことが多い。そして、あとでそれが過ちだったと気づいたときに後悔をする。これが「知らず」にしてしまったことに対する後悔です。私たちは社会の中の存在です。善悪は社会によって変わります。時代が変われば価値観も変わる。そのときには問題ではなかったことが、時代が変わると問題になることもあります。

太平洋戦争後に戦犯とされた人たちで、戦争中に「自分は悪いことをしている」という自覚のあった人は少ないでしょう。これは、セクハラやパワハラもそうです。当時はそれがセクハラともパワハラとも思っていなかった。しかし、いまは大きな社会問題になっています。

中には数千年のあいだ続いている価値観もあります。それは「富裕は幸せ、貧乏は不幸」というものです。しかし、これは本当でしょうか。

「貧乏は不幸」というのは実感している人は多いでしょう。しかし、「富裕は幸せ」というのはどうでしょう。

実は、これに対して答えることができる人はほとんどいません。なぜなら、人から見れば「富裕」だと思っている人も、「自分はまだまだ」と思っている人がほとんどだからです。

どんなにお金持ちになっても、どんなに高位に上っても「もっとお金がほしい、もっと名誉がほしい」と思います。いや、お金が入れば入るほど、地位が上れば上るほど「もっと、もっと」と思います。人に対しては「わたしは幸せの絶頂にいる」みたいな顔をしていながら、心の中では常に飢えに苦しむ「餓鬼道」に堕ちてしまうのです。

親鸞聖人は、そんな富裕の状態を「七宝の獄」と言われました。金銀、瑠璃、玻璃等の宝物に囲まれていながらも、実は牢獄の中に囚われているようなもの。それに気づかずに日々を送り、そして死の直前に「もっと人生を楽しむという生き方もあったのではないか」と後悔する。

そう。後悔には取り返しのつく後悔と、取り返しがつかない後悔とがあるのです。取返しのつかない後悔は、死の瞬間の後悔です。

終末期ケアで多くの患者を看取ってきたブロニー・ウェアは、死期の患者が人生を振り返ってもっとも後悔することをまとめて、『死ぬ瞬間の5つの後悔』（新潮社）を書きました。

それは次の五つです。

一、他人の期待に沿うための人生ではなく、自分がやりたいことをすればよかった

二、仕事ばかりしなければよかった

三、自分の本心を伝えておけばよかった

四、友だちと連絡を絶やさないでおけばよかった

五、自分を幸せにしてや

ればよかった

一、二、五がまさに「七宝の獄」ですね。死の直前に、自分が「七宝の獄」につながれていたと気づいたときには、もう取り返しがつかない。

では、どうすればいいのでしょうか。「七宝の獄」を含む親鸞聖人のご和讃の全文を見てみましょう。

自力諸善の　ひとはみな
仏智の不思議を　うたがえば
自業自得の　道理にて
七宝の獄に　いりにける

七宝の獄に入る人は、「自力諸善」の人だとあります。

「自分はこんなに努力をしている」、「自分はこんなにいいことをしている」、そう思っている人です。いまの社会は、それがいいことだとされています。しかし、死の瞬間に多くの人がそれを後悔するということは、「自分の力」でなんとかしようというのが、そもそも間違っているということを意味します。

すごいですよね。とても多くの人が、死の直前に自力の人生を後悔するというのに、いまだに自力が当然だと思われている。これは一種の洗脳ですね。

「自分の力」以前に「自分」を拠り所にすること自体が間違っているのかも知れません。

その理由のひとつは、前回にも書いた、私たちが欲望によって成り立っているからです。親鸞聖人のお言葉をお借りすれば「ヘビやサソリのような心を持っている」からです。

そしてもうひとつは、「死」という人生最大の大事件を前にしては、常にゆらゆらゆれる自分などは拠り所にならないことは当然だからです。ですから、親鸞聖人は揺るぎのない「仏智の不思議」にすがるように勧めます。むろん、「仏智の不思議」が本当に正しいかどうかは、それこそ死んでみなければわかりません。しかし、少なくともこんな不安定な自分よりはずっと頼りになりますし、なんといっても何千年もの間、多くの人が拠り所としてきたという信頼感があります。かりに間違っていても、少なくとも死の瞬間には安心していられます。

「念仏すれば救われる」とおっしゃった法然上人を、親鸞聖人は信頼していました。

「たとえ法然上人に騙されて、念仏した結果、地獄に堕ちても決して後悔などはしない（**たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄に堕ちたりとも、さらに後悔すべからず候**）」とおっしゃいました。

これはただ、単に法然上人を信頼していただけではありません。親鸞聖人も万巻の仏典を読んで研究されました。その結果、法然上人を信頼するかりにそれが間違っていて地獄に堕ちてもいい、そうおっしゃるのです。

「あなたと一緒に同じ墓に入りたくない」と言われた知人の話を前回、書きました。そう思って、墓を別にするという行動を起こす人もいるでしょう。しかし、死の直前、言葉も話せなくなってから、「やっぱり元の通りにしておけばよかった」と後悔しても遅いのです。人は息が止まってからも十数秒間、意識があるといいます。私はこの時間に最後の夢を見るのではないかと思っています

むかし電話の音と目覚ましの音が同じだった頃、電話の音だと思って目覚めたら、実は目覚ましの音だったということがありました。不思議なことに、目覚ましの音はほんの数秒なのに、電話がかかってくるまでの物語がちゃんとある。ほんの数秒の間に、数時間の出来事が作られているのです。ふだんの生活の中の時間を「横（数直線）の時間」だとすれば、夢の中の時間は「縦の時間」です。一瞬のうちに数時間が含まれる、そんな時間です。

人生最後の夢の十数秒は、特に濃いはずです。その十数秒の夢は、それこそ無限に続く夢かも知れません。そのときの後悔は、無限に続く後悔です。

そして、それこそが地獄なのかも知れません。よく「した後悔よりも、しなかった後悔の方が大きい」といいますが、そんなことはないということは経験からでもわかるでしょう。「なぜあんなことをしてしまったのだ」とあとで何度も何度も思います。

死に臨んでそんな後悔をしないためにも、それこそ騙されたと思って「自力諸善」から「仏智」を頼む生き方に変えてみるのも、ひとつの手です。

図書紹介

『能』
―６５０年続いた仕掛けとは―
著者　安田登
７６０円＋税
新潮新書

なぜ６５０年も続いたのか。

足利義満、信長、秀吉、家康、歴代将軍、さらに、芭蕉に漱石までもが謡い、愛した能。

世阿弥による「愛される」ための仕掛けの数々や、歴史上の偉人たちに「必要とされてきた」理由を、現役の能楽師が縦横に語る。

「観るとすぐに眠くなる」という人にも、その凄さ、効能、存在意義が見えてくる一冊。

【巻末に、「能をやってみたい」人への入門情報やお勧め本リスト付き】